
暗闇からのキボウの歌

すかぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇からのキボウの歌

【Nコード】

N2829Y

【作者名】

すかぶ

【あらすじ】

大人気アニメAngel Beats!の二次創作小説となっています。

岩沢×オリ主とベッタベタですが、楽しんでいただけたらうれしいです。

注) かなり原作とは違いますのでその点はお許しを。

無力

「一枚、二枚・・・」
俺はいま万札を数えている。

「・・・よし、ちゃんと三十万あるな」
なぜかって？それは今日はアイツの誕生日だからな。

アイツはギターをやっている。

腕はかなりの物で時々俺と弾き合ったりもする。

かくいう俺もギターに没頭している人間の一人だ。

俺もアイツもバンドを組んでいないので周りからは不思議な目で見られることもある。別に気にしてないしバンドにも興味ない。

アイツもあまりバンドには興味ないらしい。そんなだから通じ合うところもあつたのだろう。

俺とアイツは普通に恋をして付き合つて普通の恋人同士のような毎日を送るはずだった。

・・・けれどアイツは三日前に死んでしまった。原因は脳梗塞だそうだ。

アイツが脳梗塞で倒れて死ぬまで一ヶ月もあつたのに見舞いの一つも行つてやれなかった。

俺の少ない人間関係じゃ三日前にアイツが死んだことを知るのが精一杯だった。

だから俺は、アイツが気になると言っていたギターを買つてやろうと決心した。

『お前、何か欲しいも乗つてあるか？』

『ううーん・・・特には』

『そつ言うなつて、一つくらいあんだろ？』

「・・・私は・・・お前が側にいてくれれば何もいらぬ・・・」
「え？今なんて行つた？？」
「な、何でもない！あ！あれだ！前紅騎と一緒に見に行つたギター！」
「ああ・・・あれか、けどかなり高かつたぞ・・・俺たちには手の届かないくらい・・・」
「・・・だから何も無いっていつたじゃないか」
「ん〜・・・そっかあ」

せめてもの償いに・・・

「すみません・・・」

俺は急いでアイツが眠っている墓へ向かつた。

アイツの両親は連絡をしても身元の引き取りを拒否したらしい。

だからアイツは死んだ病院の近くの墓に埋葬された。立ち会つたのは担当の医者だけ。

俺は許せなかつたアイツを見捨てた両親を、アイツの夢をいとも簡単に切り捨てた神様を。

最後まで何もしてやれなかつた自分自身を。

俺は無我夢中で走つた。一秒でも早くアイツに会いたかつた。

キイイイイ

「・・・え？」

雨が降つて濡れた路面。

霧によつて悪くなつた視界。

酒に酔つた運転手。

「・・・岩・・・沢」

ぐしゃあ・・・

俺は何の抵抗も出来ずにトラックの下敷きになつた。

無力（後書き）

少しずつ、確実に更新していきたいと思います。
応援よろしくお願いします。

死後の世界（前書き）

楽しんでいってください

死後の世界

「・・・はっ！」

ここはどこだろう？

確か俺は・・・トラックの下敷きになって・・・

俺は死んだのか・・・

「じゃあアイツもいるのか」

・・・アイツ？アイツって誰だ？そもそも俺はなんでトラックの下敷きに？

「・・・くっ、思い出せない」

「何が思い出せないのかしら？」

振り返ると3メートルほど先に銀髪の少女が立っていた。

「・・・だれ？」

「名前を聞く前にそちらから名乗ったらどう？」

それもそうか・・・

「俺は綾崎紅騎^{あやざきこうき}。ここはどこなんだ？俺は生きてるのか？」

少女は無表情で答えた。

「ここは死後の世界。あなたはもう死んでいるわ」

やっぱり俺は死んだのか。でも本当に死んでるのか？脚はちゃんと生えてるし心臓も動いている。

「教えてくれ、俺は本当に死んだのか？」

少女の口元がかすかに動いた。

「hand sonic」

少女の腕から刀身が形成され少女がかがんだと思うと、いつの間にか距離がゼロになっていた。

「教えてあげる」

ドシューッ

「ぐ・・・はぁ・・・」

心臓を貫かれた。

一気に視界が狭まり後はただ暗闇だけが広がっていった。
「まったく・・・なにやってんのよコイツは」
そんな声を聞いた気がした。

死後の世界（後書き）

忠実なようなそうじゃないような・・・
曖昧ですみません・・・

戦線前線基地（前書き）

ここは結構忠実になってると思います。
それではどうぞ！

戦線前線基地

「んっ……まぶし……」

目元に強い日差しを感じて俺は目を覚ました。

二つ並んだ白いベッド、独特の消毒の臭い、ここは保健室か。

「……そうだ、俺は心臓を刺されて……」

刺されたあたりのところを触ってみるが傷一つ着いてない。

本当は刺されていないと思ったが制服にくつきりと刃物で刺したような穴が開いていた。

「いったい何だったんだ……」

「あ、気がついたみたいね」

一瞬警戒したが昨夜の少女じゃなくて少しほっとした。

「だれだ？アンタは……」

紫の髪と目立つリボンが印象的な女の子だった。

「俺は綾崎紅騎、アンタがここまで運んできたのか？」

「わたしはゆり。そう、わたしが運んだわ」

だとすると見かけによらずかなり力があるみたいだ。

「そうか……それはありがとうな」

「ありがとうついでに頼みがあるんだけど……」

ゆりがこちらに顔をぐっと近づけてきた。

「紅騎、あなた戦線に入らない？」

「せ、戦線？」

彼女はかなりの近距離で話していることに気づいているのか？

「そう、死んでたまるか戦線。まあここじゃなんだし基地に来なさい！」

この様子じゃ気づいてないようだ。

「基地？そんな物があるのか？」

「つべこべ言わず着いてきなさい！」

強引にベッドから引きずり下ろされ俺は西部劇の引きずり回しのよ

うに連れて行かれた。

前線基地、校長室に着いたときにはとつても悲惨な姿になっていたのは言うまでもない。

「川」

・・・川？

そう言つてゆりは校長室の扉を開けた。

「みんな、新しいメンバーを連れてきたわよ」

中には女が二人と男が三人（内一人はソファで気絶している）がいた。

「お、ゆりっぺ、また連れてきたのか？・・・おおっ、二日連続で

穴あき学ランとは」

「まあ、そう言わないの」

青い髪の男、日向は俺に手を差し出してきた。

「俺は日向、まあ仲良く行こうぜ」

「ああ、こちらこそよろしく」

俺も日向の手を握った。

「んん・・・ここはどこだ？」

さつきまでソファの上で気絶した男が起きたらしい。

「お、そっちの奴も起きたみたいだぞ」

「ちようど良いわアンタも戦線に入りなさい」

「戦線？」

男はだるそうな体を起こして聞き返してきた。

「そう、死んでたまるか戦線。ん、なんかしっくりこないわね」

「じゃあこんなのはどつだ？走馬燈戦線」

「それ死ぬ寸前じゃない！」

「じゃあ死にもものぐるい戦線」

「必死過ぎじゃない！」

「四面楚歌戦線」

「死なすわよ！」

ことごとく日向の意見は没になっていく見てて痛々しいほどに。

「じゃ、じゃあここは新入りに聞いてみようぜまず紅騎から！」
いきなり俺に降ってきた。

「お、俺？」

「どうなのよ？」

ギンと睨まれた。おおこええ・・・

「ゆりっぺ戦線」

「殺す！」

ひいひい！

「お、落ち着け！じゃあ今度はお前！」

さっきまでぼーっとしてたもう一人の新人？が面倒くさそうに答えた。

「勝手にやってる戦線」

するとずっと黙り込んでいたばかりかい斧を担いだ男がつかつかってきた。

「貴様、ゆりっぺに生意気な口を！もう一回切り刻んでやろうか！？」

大分短気な男だな・・・

「勝手にやってるって言ってるんだろ！？俺にかまうなよ！おれはすぐに消えるんだよ！」

おお、コイツもかなりの短期だ。

「消える？・・・まあ運良く来世で人間になれたらうれしいでしょうね」

「どういう意味だよ」

ゆりは小さくにやりと笑うと続けた。

「ちょうど良いわ紅騎、あなたも聞いてなさい。」

「お、おう・・・」

すると周りが暗くなりスクリーンが降りてきた。

「二人とも分かっているだろうけどここは死んだ者が集まる世界よ。現世と来世の中間と言ったところかしら。ここで消えてしまつと来世は人間以外のものに魂が転成するかもしれないのよ」

タイミング良くスクリーンに様々な動物の画像が流れる。全部節足動物系なのはあえて黙っておこう。

「そこでわたしたちは戦うことにしたの戦ってこの世界を手に入れるのよ！」

今度は節足動物から一人の少女の映像に切り替わった。

無表情で金色の瞳、透き通るような肌輝かんばかりの銀髪。

昨夜俺の心臓を貫いた張本人だ。

隣の新入り二号（仮名）も同じような表情をしている。

「これが私達の敵”天使”よ。こいつを倒してこの世界を手に入れるの！」

スクリーンが戻され部屋が明るくなった。

「改めて聞くわ戦線に入ってくれない？」

最初に口を開いたのは新入り二号（仮名）だった。

「少し考えさせてくれるか？」

「いいけどこの部屋以外でね。」

どういう意味だろう・・・新入り二号（仮名）は悔しそうな顔を浮かべているが。

「分かった。合い言葉は？」

観念したように了承した。

「紅騎、あなたもよ」

俺か・・・まあ、行く当てもないし断る特別な理由もないし。

「俺も入るよ、死んだ世界戦線に」

「いいわね、その死んだ世界戦線って。よし採用！」

ゆりはぐつと親指を突き出した。

片思いな再会（前書き）

ここからぐっとオリジナル臭が漂ってきます。

片思いな再会

「それじゃここにいるメンバーだけでも紹介するわね。彼は日向君。その横が野田君バカっぽいけどバカよ」

日向が苦笑する。野田の方は別に気にした様子は見せていない。

「その隅っこにるのが椎名さんで、そっちにいるのが岩沢さん、彼女は陽動班のリーダーなの」

岩沢だったっけ？がこちらをじっと見つめてきた。俺の顔に何か着いているかな？

「そしてわたしがゆり、戦線のリーダーよ」

「俺は綾崎紅騎だ。」

「俺は……音……無……？」

「音無か……記憶がないパターンはさほど珍しくない。まあ時期に思い出すさ。」

日向が音無の肩をぼんと叩いた。

「じゃあ、音無君はわたし達と実際に行動する方に入ってもらうわ。綾崎君は岩沢さんの陽動班に入って」

「ん？俺が陽動班？なんで？」

「だってさつきから岩沢さん綾崎君の方をずっと見てるんだもの。」

岩沢さん、気に入ったの？」

岩沢さんは黙って俺の方に近づいてきた。

「綾崎……紅騎……なのか……」

「そ、そうだけど……岩沢さんだっけ？俺の顔に何か着いてる？」

その瞬間岩沢さんは驚いたような表情を見せ、うつむいたかと思いきり俺に平手打ちをしてきた。

バシン！！

「……馬鹿！！」

そう叫ぶと岩沢さんは校長室、もとい前線基地から飛び出している。

一瞬しか見えなかったが岩沢さんは泣いていた。

「……あゝあ紅騎、初日から女を泣かせやがって日向あきれたような顔をしていた。」

「……浅はかなり」

ここにきて初めて椎名さんの声を聞いた気がする。

「……で、綾崎君、岩沢さんとは生きていた世界からの知り合い？」

俺が死後の世界に来てまだ一日もたっていない。それに岩沢さんとは初対面だ。

つまり生前岩沢さんと会っていた事になるのだが……

「分からない……というより思い出せないんだ……」

「何だ、お前も記憶がないパターンか？」

いや、生前のたいたいのことは覚えている。生まれたときから死ぬまで。

……けど何かが引っかかる。

「分からない……分からないんだ……」

「それじゃあ今日は解散よ、綾崎君はちょっと残って」

「……はい」

片思いな再会（後書き）

・・・まあこうなるのは必然的でしたね。
今後どう書いていくか楽しみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2829y/>

暗闇からのキボウの歌

2011年11月7日08時21分発行